厚生労働大臣賞（優秀賞）

命を守る貴重な水

栃木県　宇都宮短期大学附属中学校　二年　安藤　萌々愛

「蛇口から直接水を飲むなんて?!」私にとっては大きな衝撃でした。私が幼いころ住んでいたアメリカでは、水は「買うもの」でした。私たち家族はウォーターサーバーにミネラルウォーターの入った大きなボトルをセットして、そこから水を飲んでいました。

また、ミネラルウォーターを注文していない家庭では水道の蛇口に必ずフィルターをつけていました。アメリカの水道水は塩素の強い硬水で、ピリピリとした感じがします。私は日本に帰国して当たり前のように家族が水道水を飲んでいるのに驚きました。現在我が家はミネラルウォーターを購入していないし、水道にフィルターもつけていません。

それでも私は日本の水道水が大好きです。こうして水道の水をおいしく飲めるということはとても幸せなことだと実感しています。

また日本のレストランに入ってとても驚いたことがありました。私たちが席についた途端にまだ何も注文をしていないにもかかわらずお店の人が私たちにお水を運んできます。アメリカではお客が頼まない限り水は出てきません。水には値段がかかるのです。

水を無料で提供するということは日本のおもてなしの文化によるものだと思いますが、それだけ日本の水はおいしくて安心して飲めることが、世界中に証明されているのではないでしょうか。

私はアメリカの学校にいたときにハイチという国の子どもにプレゼントを送ったことを覚えています。先生の説明ではハイチの人は飲料水を口にすることができる人は少なく、多くの人は飲み水には適さない水を利用しているそうです。その水には虫や菌が混入していて感染症や下痢を引き起こします。ハイチでは乳幼児の死亡率が高く、その原因の第一位は下痢であることも不衛生な水と関係しています。また、遠い水源まで水汲みをさせられる子ども達の中には、家事手伝いに時間を取られ、学校に行くことができない子どももいます。夜明け前に起き出し、暗く危険な道を通って水を汲みに行かなければなりません。

まだ幼かった当時の私はハイチの子ども達にぬいぐるみを送りましたが、今なら少しでも安全な水を届けてあげたいと思います。

今年四月に大地震が熊本県を襲いました。現在も多くの方々が避難所で不自由な生活を強いられていますが、先日テレビの報道番組で実に印象的な言葉を耳にしました。「今、一番必要なものは何ですか。」そう、レポーターが現地の方々に尋ねたところ答えはすぐに返ってきました。

「水です。」

私の母は約二十年前に阪神大震災を経験しています。母の住んでいた東灘区は倒壊した家屋が多く、救援物資はなかなか避難所に届けられなかったそうです。水道の水が出るようになったのは震災から三ヵ月たった後でした。一日一回給水車が来たときにタンクをもって、飲み水を確保したそうです。またトイレの水も流せず不衛生な状態が続き避難所での生活は大変だったそうです。入浴する水もなく水のいらないシャンプーを買い求め、水が出る大阪の方まで通ったりしたそうです。

蛇口をひねれば当り前のように水が出て、安心しておいしい水が飲めるということ、このことはとても貴重なことだと改めて今感じます。水は私たちの命を支えてくれています。

アメリカの高校生たちはハイチにボランティアに行って手洗いの仕方を教えたり建築作業や農作業を手伝っていました。私が将来、国内外で様々なボランティアに参加することができるならば、世界中の人々が安心して飲める水を提供できるようなお手伝いをしてみたいと思います。その夢の実現の前にまず自分が水の大切さを認識し、水に感謝し、そして一人一人が水を大切に使うことができるように訴えていきたいと思います。このことが私にあたえられた使命だと考えています。